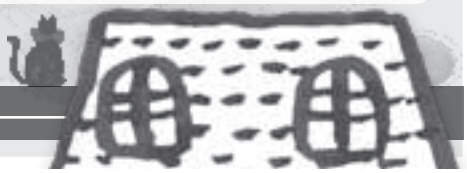
連　載●5

認知症の人の終末期を考える

8.9月は　島薗　進 教授

●東京大学文学部・
大学院人文社会系研究科

（しまぞの・すすむ）東京大学大学院人文社会系研究科教授（宗教学）。筑波大学哲学思想学系研究員、東京外国語大学助手・助教授を経て、東京大学文学部（大学院人文社会系研究科）宗教学宗教史学科教授。1996年シカゴ大学客員教授、1997年フランス社会科学高等研究院招聘教授、2000年チュービンゲン大学の客員教授、2006年カイロ大学客員教授。



認知症者のケアと安らぎ

●個の尊厳といのちの循環の死生観

まださほど進んでいない段階の認知症の人が、自分の症状に困惑している姿が忘れられない。私は職場の、また近い親族の一員が、10年余りの認知症の進行を経て60代前半、70代前半で世を去っていったのを見送ったことがある。従来できていたことができていないのに、何とかできているように取り繕おうとしている。そこに少し真剣さと焦燥感が感じられるのだが、それも次第にいい加減になっていく。周囲はとても悲しいのだが、本人は必ずしも苦悩で押しつぶされるというふうではない。

その人に個人として敬意をもっていた時のことが思い起こされて見ているのがたいへんつらい。無力感による苦悩が垣間見られるのだが、その苦労の重みもなくなっていく。すでにこちらからの思いが届きにくい向こう側に、その人の本体は移ってしまったのかと疑われた。世話をする側は個の尊厳の喪失の悲しみで押しつぶされるほどかもしれない。だが、ある個人がこの世離れしていくということの中には安らぎがないわけでもない。つまり、苦悩を通り越した平安に向かっていくプロセスとして受け止めることもできはしないか。少なくとも自分にそう言い聞かせようとしたことが私にはある。

深沢七郎の『楢山節考』では生命力を保持し続けてしまうことに打ち克つ老女が描かれている。姥捨山に自ら身を置こうとする凄絶な意志と緊張感はほとんど十字架にかけられるイエスのようだが、それは目覚めようとする根強い力を表現してもいる。個としての尊厳を保ち、あくまで後続世代のために貢献する高齢者は、もちろん最大限の敬意に値する。そうなりたいものだが、同時に個の輪郭を失い枯れていく様子を通して平安を表現し、次世代に伝えていくという道もあるのではないだろうか。

30代の頃、当時80代になる伯父の、大学時代の同期会に数年間つきあわされたことがある。こまめな伯父だったので、同期会の世話役を務め続けたのだ。伯父が86歳で死んだ後も数年間続き、伯父の遺族の代表として何度か出席した。伯父には子どもがいなかったので、世話になった私がつきあわざるをえなかったのだ。

その集いは、同期会メンバーとその夫人、さらに少し年少の関係者が集まる集いとなり、最後は同期会メンバーは２、３名になったのだが、それでも細々と続いていた。その会ではほとんどおたがいの会話もない。集まって挨拶らしきものをし、静かにじっとすわり、食事をし、別れていく。それでも会は開かれ続けていた。私にはそれは、死者の世界へと向かって静かに歩いて行く道のりのように感じられた。同期の人びとは向こう側にいるのだが、同期会が開かれるときにはその場に来ているのではないか。

もし、次第に意識や記憶が衰え、からだの働きも枯れていって、やがて死の安らぎに向かっていくことをそのように感じ取れるとしたら、老いていくことをだいぶ受け入れやすくなるのではないか。かつて「ホトケ」となり「先祖」となると考えられていたことの中にはそのような安らぎとしての老いと死のイメージも含まれていたのではないだろうか。その頃、人は「認知症」を今よりももっと柔らかく受け止めることができたのではなかったか。

地域社会で行われて来た伝統的な祭の中では、「先祖」や「鬼」がもどってきて、生者とともに交歓する状況を演ずるものがある。たとえば、奥三河で「花」とよばれる冬祭（「花祭り」ともよばれた）では、若者たちによる舞に続いて、鬼が出て来てこの世の男たちとともに踊る場面がある。そこではこの世とあの世が交じり合って、たいへん賑やかな祝祭の場が具現するのだが、その鬼は死んで行った先祖の象徴と見てもよいだろう。この世で次第に影が薄くなっていった人たちが、向こうの世界で新たによみがえり、こちらに帰ってきた―そのように感じられるものだ。

死を待つだけの「むだな」時間を過ごすかに思える認知症の人たち。だが、そこで過ごされている時は、大いなる安らぎに向かういのちの循環の、大切なリズムの一環と見ることもできるのではないだろうか。少なくとも近代以前の人たちには、そのような眼差しを身につけていた人が多かったのではないか。いやいや、現代においても、認知症の方々の世話をしているうちに、私たちはそのようないのちのリズムの感覚を取り戻すものなのではないだろうか。

終末期をめぐる医療措置について、現代人は難しい選択に迫られる。胃ろうを設けるべきか、設けた胃ろうをいつはずすのか。認知症の人の身体疾患についてどこまで病気治療をすべきなのか。食べようという意志を示さない人にどこまで食べさせるための支援をすべきなのか。肺炎の危険を冒してどこまで食べさせるのか、等々。倫理的判断はたいへん難しい。だが、あくまで個のいのちの尊厳を尊ぶとともに、大いなる安らぎといのちの循環を感じ取りつつ、認知症患者の世話をすることができるとすれば、難問に対する答えも少しなめらかに導き出せるのではないだろうか。（つづく）

（参考文献）島薗進『日本人の死生観を読む』朝日新聞出版、2012年

「胃ろう」への家族の思い❺

支部会報から探る

「胃ろう」を導入した家族の思い

●胃ろうで４年間笑顔が（福島県支部）

特養に入所して４年目、転倒後入院、誤嚥性肺炎を繰り返していたことから医者から胃ろうの造設をすすめられました。本人の気持ちを考えると胃ろうは嫌だったかも知れませんが造設を決めました。施設での暮らしは、体調が良いときは車イスで散歩をさせてもらったり、笑顔が見られたり、胃ろうにして良かったと感謝しています。

●在宅介護を続けていきたい（福岡県支部）

発病して13年経つ68歳の夫を自宅で介護していて現在は寝たきりです。昨年７月に胃ろうをして痰の吸引等24時間ケアを続けてきました。２月からは月の半分は自宅で過ごしています。以前より随分と楽な介護になったなと実感し、できる限り自宅で介護を続けていけたらと思っています。

●遠距離介護をして（大分県支部）

要介護５の86歳の実母を、13年間在宅介護をして今年の１月に看取りました。

最後の１年４ヵ月は胃ろうをし、寝たきりとなりましたが、住み慣れた家で私と２人で静かに穏やかに暮らすことができました。言葉を発せない母でしたが、私の声かけにいつもニッコリ笑ってくれ、何よりも私の喜びであり、私自身が癒されていたのだと今、感じています。

「胃ろう」を導入しなかった家族の思い

●延命治療は望まない（高知県支部）

96歳の母は、食べる量が極端に減って入院し、点滴が始まりました。家族としては100歳まで生きてほしいのです。でも自然に生きてほしいのです。私たち夫婦は胃ろうをしないという選択をしました。自然のままで見送りたいと思ったのです。食事は難しくてもなぜかコーヒー味の豆乳は飲むのです。母はほとんど最期まで毎日のように愛する息子から豆乳を飲ませてもらいました。

息を引き取ったとき、少しも苦しまずに、眠るように、ごく自然のままで穏やかな死を迎えることができました。

会費自動引き落し申込書

ホームページからダウンロードできます 家族の会 検索

ゆうちょ銀行の会費自動引き落しの登録者数は946名（６月末現在）です。たくさんのお申し込みありがとうございます。

登録がまだの方は「家族の会」ホームページから申込書をダウンロードできますので、ぜひお申し込みください（2013年度会費からの引き落し）。

●申込手順は下記のとおりです。

【申込手順】

❶トップページ 組織 タブの 会員の方へご案内 をクリック

❷「申込書様式のダウンロード」（PDF）をクリックして申込書をプリント

❸ゆうちょ銀行口座の記号・番号、名義人などの必要事項を記入、捺印

❹2013年１月末日までに「家族の会」事務局あてに郵送